



# ハーレム<sup>♣</sup> フォーチュン

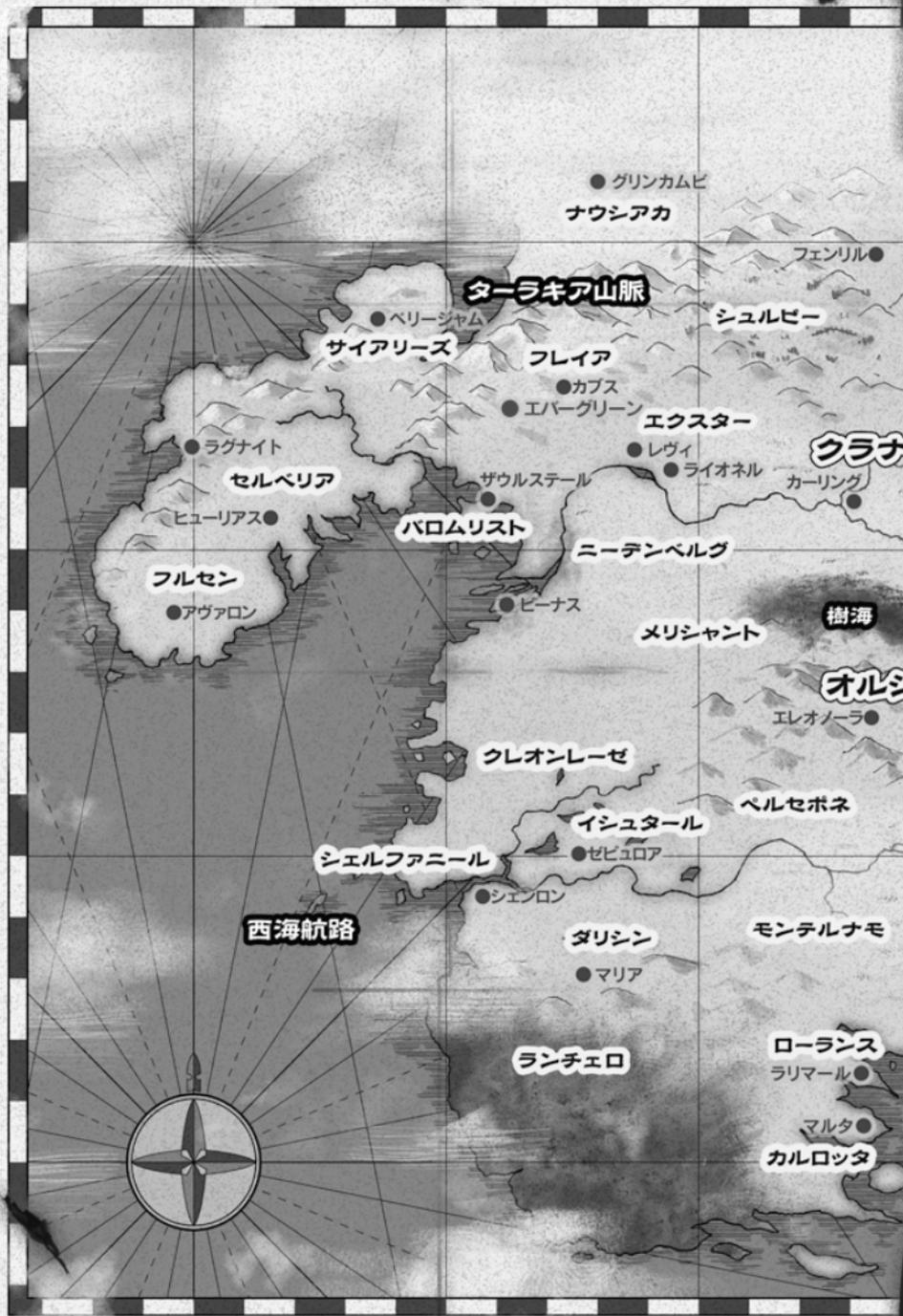
*Harem Fortune*

小説 竹内けん 挿絵 あれっくす

立ち読み版

# ハーレムシリーズの世界





● グリンカムビ  
ナウシアカ

フェンリル●

**タラキア山脈**

● ベリーシャム  
サイアリーズ

シュルビー

フレイア

● カブス  
● エバグリーン

エクスター

● ラグナイト

セルベリア

ザウルステール

● レヴィ  
● ライオネル

**クラナ**

カーリング●

ヒューリアス●

バロムリスト

ニーテンベルグ

フルセン

● アヴァロン

● ビーナス

メリシャント

**樹海**

**オルシ**

エレオノーラ●

クレオンレーゼ

ベルセボネ

イシュタール

シエルファニール

● ゼビュロア

● シェンロン

ダリシン

モンテルナモ

● マリア

**西海航路**

ランチェロ

ローランス

ラリマール●

マルタ●

カルロッタ





## 登場人物紹介

Characters



### フォルトーナ

カンタータ家の幼き当主。ツインテールの愛らしい美少女。

### ウェルキン

レナス家の息子。カンタータ家へ婿養子に出されることになった。



## タニキス

ウェルキンの側近。タイトな  
スーツ姿の、キレ者のお姉様。



## ヴィーダ

フォルトウーナの親衛隊長。  
ペガサスを駆る天馬騎士。

第一章	いらない子
第二章	空中散歩
第三章	当主の条件
第四章	根回し
第五章	立て籠もり事件
第六章	結婚初夜



「……」

返事をする前に、裸身のタニキスはウエルキンのズボンを引きずり下ろす。

ドロドロの粘液に塗れた半萎えの逸物があらわとなった。

それを見下ろしてタニキスは楽しんで笑う。

「あらあら、だらしないおちんちん。これではフォルトゥーナ姫に嫌われて当然ですね」

「う」

挿入はおろか、まだ満足な前戯すらしてないのに、暴発させてしまったのだ。男として情けない。

「まあ、焦らずにいきましょう」

楽しんで笑ったタニキスは、ウエルキンに背を向けると、そのまま逸物に座るようにして腰を下ろしていた。

白く引き締まった桃尻に、半萎えの逸物が潰される。

タニキスは長い足をM字に開きつつ、ウエルキンに背を預けると、その両手を取って自らの乳房を握らせた。

「非協力的な女の身体を責めるには、まず後ろを取るのが有効だと言われています。背後から抱き締められた女は、容易に抵抗できませんし、女がオナニーするときと同じ角度で手が入りますので、性的快感が高まりやすいのです」

「なるほど」

戸惑いつつ頷くウエルキンに、タニキスは不信感を持ったようだ。

「あれ、公子は女に性欲はない、オナニーするのは変態女だけだと思っっていますか？」

「そ、そんなことはないけど」

無意識に乳房を揉むウエルキンを背後に覗き見つつ、タニキスは断言する。

「女にだって性欲はあります。あのフォルトゥーナ姫だって夜な夜なひそかな雫を垂らしている。いや、ああいう大人しい女の子に限って、耳年増であり、一人遊びが大好きかもしれません」

「フォルトゥーナ姫に限ってそんなっ!!」

思わずフォルトゥーナ姫の名譽のために、ウエルキンは反論してしまった。

それをタニキスは冷笑する。

「性欲のない女なんていません。例えば公子から見えてわたしはどうですか？ オナニーする女に見えますか？」

「それは……」

返事に困る。

少なくとも、タニキスがウエルキンの補佐役に選ばれたあの日までは、性的なことはまるで考えたことがなかったのだ。

機械人形のような冷徹さを持つ彼女には性欲というものが一番遠く感じる。

しかし、補佐役に任じられたあの日に、無理やり生々しい女というものを教えられてし

まった。

彼女に性欲がないはずがない。

ただ、彼女が痴態を晒すのは必要に迫られての仕事上のこと。普段、一人でオナニーしているときまではとても思えない。

返事をためらうウエルキンに向かって、タニキスは哄笑した。

「オナニーしますよ。わたしはオナニーだけが趣味の女です。いつも公子の姿を遠目に見て、その愛らしい姿を脛に焼きつけ、それを思い出しながら夜、思いつきりオナニーするのが大好きなんです。どんなオナニーをするか、教えてあげます」

タニキスの告白に圧倒されているウエルキンの右手が下半身へと下ろされていった。頭髪と同じく黒々とした陰毛を、指先に捕らえる。

(湿っている……)

陰毛がすでにじっとりと湿りを含んでいた。

そして、さらに奥に無理やり、指を押し込まれる。

ぐちより。

指先になんとも生々しい温かさや柔らかさが伝わってきた。

(うわ、すげえ、ドロドロだ)

サングラスで表情を隠したタニキスが、口を開く。

「いかがですか？ わたしのオマ○コ。イヤらしいでしょう」

「うん」

すっかり気を吞まれてしまっているウエルキンは、言葉少なく頷く。

「公子の責任ですよ。わたしの身体で練習してください、と何度も申し上げたのに使ってくださらないから。欲求不満なわたしは、気が狂わんばかりにオナニーに耽ってしまった」

「ご、ごめん……」

よくわからないが、ウエルキンは思わず謝った。

「さあ、責任を持ってわたしを墮としてください。まずはクリトリスを、クリトリスを掴んでください」

「こ、これ？」

背後から手を回している形のウエルキンには、見ることはできない。

しかし、タニキスが手を操っているものだから、ごく自然と指先に、硬いシコリが当たった。

それを言われた通り、親指と人差し指で抓む。いや、引っ張り上げた。

「ひいひいひい——ッ」

タニキスの口から悲鳴が漏れ、口唇の左右から二筋の涎が垂れ落ちた。

その肉芽はかなり大粒だ。包皮からも完全に剥けていて抓みやすい。普段から、自分で弄っているんだろな、となんとなく伝わってくるようだ。

しかし、タニキスが飲んでいるのは確実に伝わってきた。

(すげえ、色っぽい。これが大人の女なんだ)

女性を感じさせる楽しさというものに目覚めつつあるウエルキンは、右手で淫核を弄びつつ、左手で乳房を揉み込んだ。

「あん、あん、あん、あん、そんなクリトリス、クリちゃんが伸びちゃう。ああ、これ以上、クリトリスが大きくなったら恥ずかしい。でも、気持ちいい。公子に弄られて幸せ、ああ、もう、イク、イク、イク、イク——ッ!!!」

ビクビクビクビク。

ウエルキンの腰の上で、M字開脚しているタニキスは盛大に嬌声を張り上げた。そして、弄り倒される大粒の淫核の下にある肉穴から、大量の熱い液体を吐き出した。

(うわ、まるで失禁したみたいじゃないか)

ソファアの前にあった木製の小さなテーブルに、女の雫が撒き散らされている。

ウエルキンは右手を、タニキスの股間から離し、五指を眼前に広げた。  
指がドロドロだ。

「ああ……恥ずかしい」

ウエルキンの眼前ということ、タニキスの眼前ということである。

絶頂の余韻に脱力していたタニキスだが、慌ててウエルキンの右手を両手で押さえると、その指先をぱくりっと啜えてしまった。

「じゅる、じゅるじゅる……」

自らの愛液に汚れたウエルキンの指を綺麗にしようというのか、タニキスは強引に吸引してくる。

(うわあ……)

指をまるで逸物に見立てたフェラチオのように見えた。

やがて満足したらしいタニキスは、指を口から離すと、溜息をついた。

「はあ、もう我慢のげんか・い♪」

「……え、何が!？」

「おちんちん欲しい。公子のおちんちんを、わたしの卑猥なオマ○コに入れてください」  
大人の女の余裕のない懇願に、ウエルキンはあつさりと乗った。

「ぼくも入れたい。タニキスさんのオマ○コの中に、ぼくのおちんちん入れたい！」

先ほど暴発した逸物は、もう復活していた。そして、タニキスの尻の谷間に挟まれて扱われていたのだ。

我慢の限界だったのは、ウエルキンも同じである。

「あはっ、公子の童貞は食べそなうてしまったようですけど、求められるというのはやはり、悪い気はいたしませんね。これが長年、レナス家のために忠勤に励んだわたしへのイヴン様からのボーナス。しっかりと味わわせていただきます」

タニキスは膝をM字に開いたまま腰を上げた。そして、いきり立つ逸物の上に、自らの膣孔を添える。

「では、頂きます」

ズブリ。

膝を開いたままタニキスは腰を落とした。

背面座位の体勢で、逸物がお姉様の体内へと埋まっていく。

そして、根元までズッポリと呑み込まれた。

「くっ、きつい……」

孔の大きさそのものはタニキスのほうが大きいと思うのだが、締めつけはフォルトゥーナに勝るとも劣らない。

逸物を握り潰されそうな締めつけに思わず出てきたウエルキンの感想に、タニキスは焦ったように口走る。

「申し訳ありません」

「え、なんで謝るの？」

戸惑うウエルキンに、耳まで真っ赤にしたタニキスが、ためらいがちに告白する。

「実はわたし、初めてなんです」

「え？ ええ——っ！ じよ、冗談だよね」

戸惑うウエルキンに、背を向けたままタニキスは自棄やけを起こしたように宣言する。

「わたしは処女でした。いま、破瓜の最中ですが、それが何か？」

「何か？ と言われても、その……」

いままで散々、大人の女として偉そうに振る舞ってきた人が、いきなりそのようなことを言い出しても信じ難い。

「たまたま処女を捨てる機会がなかったというだけです。いま公子に女体を教えることが必要と判断されましたので、わたしの身体を提供している。それだけのことです」

「ふむ」

タニキスの告白を聞いて、ウエルキンは思案する。

それから不意に、両手を伸ばすと、タニキスの顔からサングラスを外した。

「あっ！ な、何を？」

タニキスは慌てて、両手で顔を隠そうとする。

「待って、ぼく。タニキスの顔が見たいんだ。タニキスの顔を見ながらセックスしたいんだ」

ウエルキンの懇願に、タニキスは恐る恐る顔から手を離す。

ウエルキンは首を伸ばして、タニキスの左側面の至近距離からその顔を見る。

「な、何か？」

白い大理石のような頬が赤く、黒い瞳がキョロキョロと落ち着きなく泳いでいる。

「いや、タニキスって、普段は美人で近寄り難いんだけど、エッチのときの表情は可愛いんだね」

「や、やめてください！」

照れるタニキスの顔がまた可愛い。

「ぼくタニキスのことをいろいろと誤解していたみたいだ」

自分より年上で、頭がよくて、落ち着いている。少し怖いけど、頼りがいのあるお姉さん。そう思っていた。

不意にタニキスは弱気なことを口走る。

「この歳で処女って、気持ち悪かったですか？」

「え？ そんなことないよ。タニキスの初めての相手になれて嬉しかった」

ウエルキンの素直な感想に、タニキスは安堵の溜息をつく。

そして、早口で言い訳をする。

「だから申し上げたでしょ。わたしはオナニー専門の女です。仕事一途に生きてきましたから、男と付き合う時間などありませんでした。ですから、イヴン様も憐れんでくれたんでしょね。仕事として、公子とセックスしていいと」

ウエルキンはタニキスを、事務的で仕事一途、冷酷無比な女だと決めつけていた。

しかし、肉体的に結ばれたことで認識が変わった。

タニキスもまたいろいろと思ひ悩む、一人の人間であり、生身の女なのだ。

(処女であることにコンプレックスを持っていたなんて可愛いよな)

タニキスが主張していたように、セックスというのは男女がわかりあう最良の手段なのかもしれない。

タニキスに対して、一気に親近感を持ったウエルキンは、両手でタニキスの乳房を握り締めながら、イヤリングの輝く耳元で囁く。

「タニキスのオマ○コ。最高に気持ちいいから、思いつきり動きたいんだけど、大丈夫？」  
「はい。わたしはフォルトゥーナ姫と違って大人ですから、男を迎え入れる身体が出来上がっているでしょう。多少痛いですが、耐えられます。思いつきり動いてください」

「そっか。なら遠慮なくいくよ」  
もう我慢できない。

この普段は偉そうにしている官僚肌のお姉様を、自分の逸物で滅茶苦茶に犯し抜きたい。そんな牡としての破壊衝動に突き動かされたウエルキンは、M字に広げられていたタニキスの細く長い足をそれぞれ腕で抱え上げるようにして、激しく上下運動を加えた。

グチュグチュグチュ。

いきり立つ逸物が、タニキスの膣内を激しくえぐり回す。

「ひい、ひいひい、そんな、激しいいいい」

「ダメなの？」

「いえ、いいです。激しく、滅茶苦茶に突き回してください。激しくされたい。ああ、このオマ○コの中身を滅茶苦茶にされる感覚。これが女の歓び、女の歓びなのです!!!」

破瓜中だというのに、少年ならではの荒々しくも素早い腰の動きに、タニキスは涎を噴いた。

初体験。それもオナペットであった少年に犯されることで興奮しているのだろう。

「あん、はん、あん」

激しく上体を揺さぶられるタニキスは白目を剥いてしまつて、惚けている。

あの怖いほどに冷徹なお姉様が、こんなにだらしない表情になるなんて、誰も想像できないだろう。

（うお、ドロドロのオマ○コがおちんちんに絡みついてきて、消化されそう♪）

大人の女の生殖器に比べて、少年の生殖器は小さい気がするが、それを補つて余りある締めつけだ。

先に一度暴発させていなければ、あつという間に射精してしまつてるところだろう。

いや、それでも我慢できない。

「タニキス、もう、もう、でちゃう」

「はい。構いません。いつでも構いません。中に、わたしのオマ○コの中に、公子のザーメンをください！ ああっ！」

理性を失つた牝獣の懇願を聞いたときには、逸物は暴発を始めていた。  
辜丸から野生の雫が、肉棒を駆け上がる。

どびゅっ！

「あ、熱い。熱いものが入って、入ってくる」

「タニキス——っ！」



ヴィーダは我が意を得たりと頷く。

「いまの状態なら、男はどんな女の誘惑にも落ちるわ。これはチャンスなの」

「チャンスとは？」

わけがわからないと言いたげなブルーニャに、ヴィーダは懇切丁寧に説明する。

「カンタータ家の、フォルトゥーナ様の婿として相応しいかどうか、見定めることができる」

ブルーニャは合点がいったと言いたげに頷く。

「おお、そのような主旨でしたか。さすがは隊長。その深謀遠慮。それがしなどは遠く及ぶところではございません」

部下が納得したところで、ヴィーダはウエルキンに確認を取る。

「ということです。公子がカンタータ家の婿として相応しいかどうか、我々の目で見届けさせていただきたい。よろしいですね」

「うん、いいよ」

二人の会話が聞こえていたウエルキンの背筋に冷たい汗が流れたが、こうなれば自棄だ。「ということを、ブルーニャ。納得したなら、あなたも手伝いなさい」

「承知いたしました」

ブルーニャはキビキビと騎士らしく、ヴィーダの傍らに屈み込んだ。

「ここを弄ればよろしいのですか？」

「ええ、ここは男の急所。ここを調べれば、男の器量がわかるわ」

「な、なるほど……」

真面目な顔で頷いたブルーニャは、右手を伸ばし、ヴィーダの手とともに逸物を掴んだ。「これが男の生殖器ですか？ 醜いものですね。あの愛らしい姫様にこのような醜悪なものを入れたなど、なんと非道な」

「こういう逸物を短小包茎と言って、もつとも忌むべき形です。とてもではありませんが、姫様の婿として相応しくありません」

口々に罵声を浴びせられて、ウエルキンもいささか傷付いて、涙目になってしまった。

「ごめんなさい……」

「まったく側仕えの女達がなっていないのですわ。あのタニクスとかいう女、やり手と聞いているけれど、主君の包茎を治すこともできないだなんて、とんだ見かけ倒しですわね」

そう嘯いたヴィーダは、不意に逸物の突端に口を近づけると、包皮の先端を甘噛みして、さながら肉食獣が、捕らえた獲物の皮でも剥ぐかのように、引き下ろした。

「ひいひい!!!」

まさに生きたまま、身体の皮を剥かれたウエルキンは断末魔の悲鳴を上げる。

フォルトウーナやタニクスの体内に挿入したとき、自然と包皮が剥けてしまったことを、何度か自覚していた。

しかし、そのときは女性の温かい粘液に包まれていたので、それほど激痛はなかった。

単に快感がいや増したただけだ。

しかし、空気に触れるというのは、まるで針でも刺さったかのような痛みにも襲われた。真つ赤な実には白い粘液が大量に付着した亀頭部があらわとなる。

「あらあら恥垢だらけ。これはいけませんわ。こんなものを入れられたのでは姫様が病気になるてしまいます」

「はい。こんな小汚いものを姫様の体内に入れたなど許し難い冒瀆です」

ブルーニャは心底、醜いものを見た、と言いたげに顔を背ける。

「仕方ないわ。わたくし達で綺麗にしましょう」

「はあ……?」

上司の思い掛けない提案に、ブルーニャは戸惑った生返事をする。

そんな部下の耳元で、優しい笑顔のヴィーダは悪魔のように囁く。

「ここは女にとつてのクリトリスのようなところ。ここを舐められたら、この子、間違ひなく泣いちゃうわよ。姫様はこのおちんちんのせいで、酷い心の傷を受けたのよ。仕返しをしたくはない?」

「それは……はい」

上司の思惑を知って、ブルーニャの顔がぱつと明るくなった。そして、肉食獣のように笑う。

「じゃ、始めましょう」

「了解しました」

ヴィーダとブルーニャは、互いの頬を付けるようにして顔を近づけると、口唇を開き、赤い舌を伸ばして、恥垢塗れの赤い亀頭部を舐める。

ペロリペロリペロリ。

「ふぐっ」

濡れた舌が、敏感な粘膜に触れる。

唾液の粘膜で覆われるのだから、単に空気に晒されていたときよりは楽だ。そして、気持ちいい。しかし、単純に気持ちいいというのには痛みが強い。痛気持ちいいというのだろうか。

強すぎる刺激に晒されたウエルキンは、仰向けになって、大口を開けると、はあはあと犬のように喘いでしまった。

そんな少年を見下ろして、ブルーニャが嘲笑する。

「ほんとに泣いてしまいましたね。レナス家の公子たる身がなんたる様か」

いかに罵倒されようと、いまのウエルキンには理性の保ちようがない。

「そうね。トドメという意味で、ブルーニャ、あなたは公子の顔に座りなさい。あなたの臭いオマ○コで、公子の顔をグチャグチャにしてやりなさい」

「承知しました」

体育会系のノリで、ブルーニャはウエルキンの顔面に座ってきた。いわゆる顔面騎乗で

ある。

薄い陰毛に彩られた陰唇が、ウエルキンの鼻腔を塞ぐ。

「くつくつくつ、どうかしら？ 名門レナス家の公子たる身が、女の汚いオマ○コを顔面に押しつけられた気分は、さぞ屈辱的でしょう。これが終わったら、尻尾を巻いて、故郷に帰るといいわ」

憎らしい小僧を侮辱している気分なのだろう。男の顔面に自らの陰部を押しつけるブルーニャは実に楽しそうだ。

しかしながら、そんな女の優越感は、期待通りの効果を上げてはいなかった。

(うわ、凄い濃密な香り♪)

いわゆる処女臭というやつだろう。

オナニー大好きなタニキスと違って、この武闘派熱血お姉さんは自分で慰めるようなことも、あまりしないのではあるまいか。自分で弄らないのだから、よく洗うようなこともしないだろう。とにかく強烈な匂いだ。

しかし、嫌な匂いというわけではない。

牝の発する性臭だ。いやが上にも牝の性欲を煽る。

誰に命じられたわけでもなく、本能的に目の前の媚粘膜に吸いついていた。

「ひい！ な、何を舐めているんだ。貴様。そこは女がおしっこをする場所だぞ。汚いんだぞ。そこを舐めるだなんて、レナス家の貴公子としての誇りはないのか！」

少年の顔面に座りながら、舐められることを想定していなかったのか、ブルーニャは驚愕の悲鳴を上げる。

さすがは男勝りの鬼副長。性に関してはまったく疎く、少年が嬉々として、女性器にしゃぶりつく理由が理解できないらしい。

「ブルーニャさんのマン汁、美味しい♪」

「ああん、吸うなあああ!!!」

顔面騎乗で始まった行為だが、いつの間にか岩清水になってしまったようだ。

ちなみに、男の顔面に女が座るとき、女が主導権を握っていると、顔面騎乗。男が主導権を握っていると岩清水という。

そんな様子を見学していたヴィーダはくすくすと笑う。

「あらあら、ネンネだと思ったけど、クンニは上手だね。それともブルーニャが敏感すぎるのかしら♪ ……さて、わたしのほうはこんなのはどうかしら？」

顔面に女体という重石を乗せられているウエルキンの下半身が持ち上げられた。

そして、ふわふわとした物体に、逸物を挟まれる。

(な、なんだ？ この感じ……)

ウエルキンの両足は蟹股に開かれている。股の間に柔らかくも温かいものがあり、さらにいきり立つ逸物の左右からこれまた極上の柔肉で包まれるのだ。

「た、隊長。何をやっておられるのですか。そんな汚いものをおっぱいに挟むなど」

ブルーニヤの言葉で、何が起こっているかようやくわかった。

つまり、ウエルキンの下半身は持ち上げられて、いきり立つ逸物をヴィーダの豊満な乳房の狭間に包まれている。

すなわち、変則型とはいえパイズリだ。

(ヴィーダさんのおっぱいっ!!)

簡易な胸当ての上からもわかった抜群の巨乳。生で見たいと思ったことがない、と言えばウソになるだろう。

(みたい。ヴィーダのおっぱいを見たい。パイズリされている姿を見たい)

切にそう願ったが、ウエルキンの眼前にはブルーニヤの陰唇がある。

無念に思ったウエルキンは目の前の陰唇に八つ当たりするように舌を動かし、膣孔を穿り回した。

「ひいひい、そこはラメエエエエエ!!!」

悩乱の声を張り上げるブルーニヤの下で、ウエルキンは両足をぐいと閉じる。

少しでもヴィーダのパイズリの密着面を楽しようと、その腋の下をカニバサミにしてしまったのだ。

「うふふ、公子様といっても男の子なのよね」

優しく嘲笑しながらヴィーダは、乳房を左右から揉み込んでくれたようだ。

逸物は柔らかい刺激に包まれる。さらに剥き上げられた先端にも、尿道口をえぐるよう

にして、濡れた粘膜が触れる。

おそらく、パイズリしながら舌を伸ばして、亀頭部を舐めてくれたのだ。  
(き、気持ちいい……♪)

タニキスと情事の練習をするようになったとはいえ、日は浅い。その上タニキスはオナニこそベテランであったが、セックスそのものは初心者であった。

このような奔放な性戯を駆使してくれたことはない。

その上、現在のウエルキンの顔面には、ブルーニヤの陰唇が乗っている。

「も、もう、らめ、らめだ、イク」

「わ、わたしも、わたしも、ひいひい、そこはかんじやらめええええ!!!」

興奮の極致に達してしまつたウエルキンは、ほとんど無意識のうちに、包皮に包まれていた淫核を噛んでしまつたようだ。

男勝りの鬼の副長といえども、淫核は急所だつたようである。

「ヒギイイイイイ!!!」

ビクビクビクビク……プシュ。

ウエルキンの顔面で、逞しいお姉様の陰唇が痙攣したかと思うと、熱い飛沫がかつた。相前後して、ウエルキンの下半身も飛沫を上げていた。

プシュ! プシュッ! プシュッ!

柔らかい乳肉の狭間で、少年の小さくも硬い肉が跳ね回る。

「ああ」

断末魔の声とともに、ブルーニャは仰向けに倒れ、ようやくウエルキンの視界は回復した。予想した通り、大きくも柔らかそうな乳房が二つ。そのいただきには大きな目で、薄い桃色の乳首が二つ並んでいた。

そして、その狭間には自分の逸物が包まれており、あたり一面、白濁液に塗れている。

ウエルキンと視線が合うと、白濁液塗れのお姉さんは、にっこりと柔らかく笑う。

「女をイかせると同時に射精するだなんて、さすがに才能がありますわね」

「才能？」

自分にはなんの才能もない、と思っていたウエルキンはいささか不審に思う。

「女を誑かす才能です。女と一緒にイってもらうのが何よりの喜びですから」

「なるほど……」

単に煽<sup>おだ</sup>てられているだけだとは思いますが、褒められて悪い気はしない。

ヴィーダはいまだ己が乳房の谷間に包まれている逸物を見下ろして、愛しげに笑う。

「出しても全然小さくならない。やっぱり若いおちんちんって凄いわ。これなら、すぐにできるわね」

「え、何を」

ウエルキンが戸惑っているうちに、ヴィーダはウエルキンの下半身を下ろし、代わりにブルーニャを抱き締める。そして、唇を奪うと、そのまま押し倒した。いつの間にか、ブ



ルーニャは胸当てを外し、軍服の胸元を肌蹴っている。

「えっ」

ブルーニャは仰向け、ヴィーダはうつ伏せとなり、絡みあつた二人の陰唇がウエルキンに差し出される。

「た、隊長、なにをっ!!」

「もう我慢できません。わたくし達のイヤらしいオマ○コに、公子の元気なおちんちんを入れて、たっぷりお情けをください♪」

驚く部下を押さえつけたまま、ヴィーダは大きな尻をくねらせてみせる。

水色のもつさりとした陰毛に覆われた陰唇は、ドロドロに濡れていた。

ウエルキンに異存があるはずがない。

「はいっ!」

元気いっばいに応じたウエルキンは、ヴィーダの大きな桃尻を抱きかかえると、いきり立つ逸物をぶち込んだ。

ぐちより。

ウエルキンはまったく愛撫を加えていないのだが、いままで奉仕していたことでヴィーダの身体は十分にほぐれていたようだ。

奥までよく濡れている。

「ああっ♪ 遠慮はいらないわ。思いっきり腰を使って、公子の男を見せつけてください」

「任せてください」

ウエルキンは嬉々として腰を使った。

パン！ パン！ パンッ！

女の尻と男の腰がぶつかりあう拍手音が寝室に鳴り響く。

タニキスとの練習で、女とはこういうものだ、という基本はわかっていた。そのため、安心して欲望のまま、腰を振ることができると。

しかも、相手は初めての巨乳お姉さんだ。興奮のあまり逸物は火が出るほどに振り回された。

「は、激しい。小さくても硬いちんちんに滅茶苦茶に突き回されるのがこんなに気持ちいいなんて、目覚めてしまいそう♪」

普段の優しく知的な容貌はどこへやら、ヴィーダは大口を開けて、涎と舌を出しながら惚けた悲鳴を上げている。

「隊長、あなたという人は……」

尊敬していた上司のアへ顔を見上げて、ブルーニャは困惑する。

「ヴィーダさん！ ヴィーダさんのオマ○コ凄い絡みついてきて、気持ちいい。気持ちいいよ。すぐ出ちゃう！」

「わたくしも、気持ちいいです。遠慮はいりません。わたくしの中に、わたくしの中に思いつきぶっかけてください」

フォルトウーナの健気さが、いやが上にも男心を刺激する。射精したばかりの逸物が、何事もなかったように隆起してしまう。

ウエルキンはフォルトウーナの肩を抱いて、仰向けに押し倒した。そして、鼻先で宣言する。

「入りたい。いいよね」

「う、うん……でも、後ろ向きのほうが……」

どうもフォルトウーナには、セックスは後背位でするもの、という先入観が強固にあるようである。

「いや、今回は、正面からフォルトウーナの顔を見ながらしたい」

「……うん、いいよ」

少年の断固たる主張に屈した少女は、戸惑いながらも頷いた。

許可をもらったウエルキンは、フォルトウーナの細い足を持って左右に開く。

毛のないぷつくらとした肉割れは半ば開き、中から大量の愛液を濡れ流していた。

そこに逸物の切っ先を添える。

「い、入れるよ」

「うん。……でも、顔を見ながらだと、なんか照れ臭い」

フォルトウーナは視線をどこに持っていったらいいのか、と言いたげに右側に逸らす。

そんな少女の体内に、前回失敗しているだけに、ウエルキンは慎重にゆっくりと逸物を

押し進めた。

ズルリ……ぬぼ。

逸物はあっさりと呑み込まれた。

前回のような激烈な痛みはないようだとは察せられたが、気を使って声をかけてみる。

「どお、痛い？」

「ううん、温かくて……き、気持ちいい……」

前回の挿入で、一応、処女膜は破れている。そのとき痛めた傷も、時間とともに癒えたのだろう。

「よかった」

ウエルキンは心の底から安堵した。

フォルトウーナもまた安堵したようだ。

「う、動いて、いいよ。今日は大丈夫みたいだから」

「そっか、それじゃ、動くね」

ウエルキンは慎重に腰を引いた。

ズル……

逸物が女体から抜け出してくる。

「あ、そんな、そんな、あ、あそこが裏返っちゃう♪」

逸物が引かれるに従って、膣壁も裏返りながら外に出る感覚に囚われたらしい。

驚いたフォルトゥーナは、逸物が抜けないようにと、四肢を使って抱きついてくる。  
(うわ、凄い密着感♪)

少女の薄い胸の膨らみを、自らの胸板で感じたウエルキンはゆっくりと抽送運動を繰り返す。

「はあ、はう、ふ、不思議な感じ、全然痛くない。ああ、でも、気持ちいい。みんなが言っていたのってこれなんだ」

同じ歳の少年と少女である。性器の大きさもちょうどよい、ということなのだろうか。大きすぎず小さすぎず、ぴったり合っている気がする。

先ほどシックスナインで射精したばかりなのに、ウエルキンはじっくりと楽しむ。「このままずっとフォルトゥーナと繋がってほしい気分だ」

「わたしも、このおちんちんなら大丈夫。妻としての役目を果たせそう」  
「よかった。……あ、そうだ。いいことを思いついた」

肉体が一体となり、心もまた通いあった実感を持ったウエルキンは、不意に閃いた。フォルトゥーナを抱き締めたまま立ち上がる。

「えっ、何を!!」  
驚愕するフォルトゥーナはぎゅっちりと、さらに強くウエルキンに抱きつく。

ウエルキンは両手で、フォルトゥーナの尻を掴まえながら、立つ。対面立位になると、寝台から下りた。

どすん！

「ひいあ♪」

逸物が子宮口を撃ちすえて、フォルトウーナは大口を開けて唾液を噴く。

ウエルキンはそのまま構わず絨毯を踏み締めて歩いていくと、窓を開けて、露台に出た。

「ちよ、ちよつと、やめて。見られる。見られちゃう」

領主としての体面を気にして、フォルトウーナは悲鳴を上げるが、ウエルキンは逆だ。

「ここからなら、ブルーニャ達が立て籠もっている棟から見えると思うんだ。見せつけてやろうよ」

「え、ど、どどどどういうこと？」

「ぼく達が仲良くしているところを見せてあげれば、ブルーニャは安心して今回のバカげた反乱をやめるよ」

そう嘯いたウエルキンは、大きく息を吸った。

そして、満腔から声を出して絶叫する。

「ブルーニャ、見えるか！ ぼくとフォルトウーナはこんなにラブラブだぞおおお!!!」

ウエルキンの雄叫びに驚いて、城の窓から様々な人が顔を覗かせる。

騎士もいれば文官もいた。執事、侍女、庭師。城内にはいろいろな人が働いている。

それらがみな裸で抱きあう、いや、結合するウエルキンとフォルトウーナを見た。

たとえばウエルキンの呼びかけが耳に入らなかった者でも、話を聞きつけてきたのだろう。

次々と人が増えて、黒山の人だかりになってしまった。

タニクスや、ヴィーダの顔もあり、いずれも呆れ顔だ。そんな多くの顔の中に、部屋の窓から外を窺う反乱軍の一味の顔もあった。

それに気づいたウエルキンは呼びかける。

「ブルーニャ、こっちに来てよく見るといいよ」

ウエルキンの呼びかけに我に返ったのだろう。

猛然と飛び出したブルーニャは、庭に待機させていた天馬に跨がると、大剣を片手に急上昇してきた。

「き、貴様ああああ!!! どこまで姫様を侮辱するのかああああ!!!」

激怒したブルーニャは、ウエルキンを真つ二つにしそうな勢いで叫んだ。

いや、事実、そうしようとしたのだろう。

そこにフォルトウーナの声がかかる。

「待って、ブルーニャ」

「ひ、姫様……」

いままさに振り下ろされようとしていた大剣が寸前のところで止まる。

「わたしは、ウエルキン様と添い遂げます」

「何をおっしゃられるのです。こんな女としての恥をかかされて」

困惑するブルーニャを、フォルトウーナは必死に説得する。

「恥だと思っていない。わたしウエルキン様と繋がれて幸せなの。わたしが幸せなのを、みんなに見せてあげたいと思う。ブルーニャ見て、わたし、好きな男の子に貫かれて、凄  
い幸せ」

フォルトウーナの告白に、ウエルキンの胸もときめく。

「大事にするよ。マイハニー♪」

「ダーリン。愛の証をわたしの中に注ぎ込んで、もう我慢できないの。子宮が焼けてしま  
いそう」

「了解。ぼくももう我慢できない」

ウエルキンは、フォルトウーナの尻を抱いて、激しく突貫する。

しかし、ウエルキンの腕力では、そうそう長い間女の子を抱えて、腰を振るっているこ  
とはできない。

腕力の限界を察したウエルキンは、一旦フォルトウーナを下ろす。

「フォルトウーナ。どうせだから、みんなにもっとよく見せてあげよう」

「え、ええっ!!」

結合は解かないように意識しながら、フォルトウーナの身体を反転させて、バルコニー  
の手すりに掴まらせる。

ウエルキンは後ろから抱きついて、胸を揉みながら腰を叩き込む。  
背面の立位だ。

パンツ！　パンツ！　パンツ！　パンツ！

少女の尻と少年の腰がぶつかりあい、景気のいい音が響き渡る。

「ああ、こんな、みんなに見られながら、やられるなんて、恥ずかしい。恥ずかしすぎる。でも、好きな男の子にやられている姿を見られている、と思うと気持ちいい。ああ、頭の中真っ白。セックスってこんなに気持ちいいんだ♪　ああ、わたしのダーリンのおちんちん、気持ちよすぎる♪」

全身を視姦されている、ということ、フォルトウーナの全身が燃えるように火照っているようだ。

（うゝむ、フォルトウーナのオマ○コって後ろ付きってやつなのかもな。前からやるよりも、後ろからやるほうが断然に感度がいい感じだ。オマ○コがキュンキュン縮まる。これじゃすぐ出ちゃう。でも、こんな衆人環視の中ですぐに出すなんて格好悪い。我慢しないと）

すべてを投げ出してしまったフォルトウーナとは逆に、変な見栄に囚われたウエルキンは必死に射精を我慢しながら腰を振るう。

「ああ、もう、ダメ、気持ちいい、気持ちいい、気持ちいい」

フォルトウーナはいわゆるイキっぱなしの状態に入ってしまったようだ。

小さな膣孔が狂ったように吸引して、逸物を吸い上げてくる。

（ちよ、ちよつとフォルトウーナさん、そんなに締められたら、もう……だめだえええ）

心の中で断末魔の悲鳴を上げながら、ウエルキンは射精した。

ドクン！ ドクン！ ドクン！

「ふああああああ！ 入ってきた！ 凄く熱いものが子宮に、入ってきた。ああ、気持ちいい、気持ちいいの〜〜〜♪」

膈内射精されたフォルトゥーナは、気持ちよさのあまり脱力してしまったのだろう。

ちよろ、ちよろ、ちよろちよろ……。

下半身で小さな水蛇が漏れ出したかと思うと、たちまち大蛇へ変化していった。

「あ、だめええ、みないでええ」

フォルトゥーナの羞恥の悲鳴とともに、

ビュユユユユツツツ!!!

逸物を叩き込まれている、ほんの少し前。淫核の少し下から液体がシャワー状に噴き出した。

陽光を浴びてキラキラと輝き、小さな虹ができた。

「うわああ」

なかなか見応えのある光景である。

女の子の失禁とは、男の射精とは違うのだろう、とはわかるのだが、どうしても連想してしまうのが男の性だ。

やがて放尿が止まると、フォルトゥーナは啜り泣いてしまった。

「ひっく、ひっく……。わたしなんてはしたない」

信頼する家臣領民達に見守られながらの、衆人環視の中でセックスして、絶頂失禁である。

精神的にかなりきつかったらしい。

思わずウエルキンは抱き締めて慰める。

「おしっこ漏らすほどに飲んでもらえて嬉しいよ」

「うう、エッチいい」

顔を真っ赤にしたフォルトゥーナは恨みがましく睨んでくる。

「これからもつとエッチなことをしようね。ぼく、フォルトゥーナにいっぱいエッチなことをしたいんだ」

「うん。あなたがいままで浮気した誰よりも、愛してくれないと嫌よ」

そんな二人つきりの世界に浸っている少年少女の耳に、突如として凄まじい破壊音が飛び込んできた。

ガシャンッ!!!

大きな音に我に返り、何事かと見ると、目の前に浮遊する天馬の上に跨がっていたブルーニャの手に大剣がない。

どうやら、地上に落としてしまったらしい。

ブルーニャの目はうつろで、完全に惚けている。



この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**

竹内けん

Takenti Ken presents harem series official guide

# ハーレムシリーズ

## 公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、  
「歴史年表」「人物相関図」  
等々あの超人気シリーズの  
世界観を網羅した  
**完全ガイドが登場!!**

特別描き下ろし  
イラストも多数収録!



*Now On Sale!!*

A5判/定価990円(税込)

特設サイトはこちらからアクセス!!

<http://ktcom.jp/harem/>

# キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな  
ハーレム系ライトノベル!

**二次元  
ドリーム文庫**

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!  
かなり過激なライトノベル!

**二次元  
ドリームノベルズ**

サイズ:新書

※二次元ドリーム文庫とは異なり、美満の方が多いです。

日常に密着したエロス、リアルな  
舞台設定で送る官能小説レーベル!

**リアルドリーム文庫**

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?  
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

**あとみっく文庫**

サイズ:文庫

詳しくはKTCの  
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!



# キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ! 19日発売!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルのバックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のおいしいBlogも更新中!



<http://www.comic- Valkyrie.com/>



<http://www.cran-berry.com/>



<http://www.mille-feuille.jp/>



<http://www.2d-dream.jp/>

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!